

プラネタリー・ジェントリフィケーション についてのノート

原口 剛*

Takeshi HARAGUCHI

A Brief Note on Planetary Gentrification

1. はじめに

2018年3月24日、ポスト・アーバニズム・プロジェクト研究会の主催により、カンファレンス「東アジアの文脈におけるプラネタリー・ジェントリフィケーション」が開催された。カンファレンスでは、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（シン・ヒュンバン (Hyun Bang Shin) 氏）から、出版されたばかりの編著 *Planetary Gentrification* に関する報告が行なわれ、またこれに回答して結城翼氏（日本寄せ場学会）と木村正人氏（高千穂大学）から、渋谷や山谷のジェントリフィケーションや、反排除の闘争について事例報告が行なわれた。小規模なカンファレンスではあったが、そのぶん長い時間をかけて、濃密な議論が交わることができたと思う。筆者もまた、この場で司会をつとめながら、議論に加わった。本稿では、シン氏の報告に対し筆者が投げかけたコメントや当日交わされた議論をふり返りつつ、今後の議論にとってカギとなるであろう論点を書き記しておきたい。

ルース・グラスが「ジェントリフィケーション」という造語を生み出してから、50年以上の年月がたった。この造語は、やがて都市研究の中心的概念となり、論争を巻き起こしながら絶えず新しい議論の地平を切り開いてきた。現代におけるそのフロンティアが、プラネタリー・ジェントリフィケーション（以下、PG）論である。その「新しさ」として、まずは対象とする地域の拡張が挙げられよう。PG論は、これまでのジェントリフィケーション研究では周縁的であった南米や東アジアの諸都市へと視野を広げている。しかし、研究リストに新たな事例を追加したことが、その意義のすべてではない。PG論の重要性は、ジェントリフィケーションの理論に革新を迫ろうとする点にある。

2. 資本の第二次循環

PG論の理論的な射程は壮大である。それは、ジェントリフィケーションを批判的に分析することを通じて、資本主義そのものを問題化しようとするプロジェクトである。PG論は、そのための視座をいかにして組み立てようとするのか。デヴィッド・ハーヴェイによる資本主義と階級をめぐる問いが、その視座を生み出すための基盤となっていることに注目したい。

たとえばPG論の理論的な柱となっている概念のひとつは、「資本の第二次循環」である。この概念は、もともと『都市と社会的不平等』のなかで予備的に論じられ（Harvey 1973=1980）、『空間編成の経済理論』において明瞭に図示されるに至った（Harvey 1982=1989-1990）。この概念をもってハーヴェイは、資本主義がみずからに課した「限界」を乗り越え存続するために、生産現場における労働力の搾取（第一次循環）から、国家や金融機関などによる信用制度を媒介とした建造環境の「生産」（第二次循環）へと回路を切り換える論理を示した。周知のようにこの議論は、「空間的回避 (spatial fix)」などの概念や、アンリ・ルフェーブルの「空間の生産」論 (Lefebvre 1974=2000) と並んで、人文・社会科学における空間論の基盤を形成した。現在では古典的ともいえるこの概念が、まちがいなくPG論の骨格を成している。ただし、そこには新たな知見が加えられている。「第一次循環」と「第二次循環」は、基本的には、前者が限界に行き着いたときに後者へと切り換えられるような、継起的な関係として捉えられていた。これに対しシンは、中国における都市化においては第一次・第二次循環が併存しつつ互いを強化している論じ、両者は同一の都市や国において並存しながら展開しようと主張している (Shin 2014)。この論点は、

* 神戸大学

空間論の原点へと私たちを連れ戻すものである。かつてハーヴェイは、以下のようにルフェーブルを批判していた。

しかし、第二の回路が第一の回路に取って代わるという〔ルフェーブルの〕議論は、早まったものである。二つの回路はそれぞれが他方にとって根本的なものがあるが、やはり、産業資本に基づく第一の回路の方が支配的である。第二の回路から生み出される圧力が、第一の回路の安定性を脅かしているが、それはこの二つの回路のあいだの矛盾は、たえざる緊張の源である一方、現在、第二の回路は第一の回路よりもはるかに危機的傾向にあるように思われるからなのである。(Harvey 1973=1980, pp. 416-417.)

つづけてハーヴェイは、「社会における剰余価値の循環は複雑な問題であり、それは、われわれが都市化の力学を取り扱う手助けにはなるが、そのためには、もっと多くのことが解明されなければならない」と述べる。つまり、ルフェーブルが「第一次循環から第二次循環へ」「モノの生産から空間の生産へ」という時代の移行を強調するのに対し、ハーヴェイはその議論の骨子を認めつつも、両者がとりもつ空間的関係の多様性へと目を向けるよう促した。シンによる上記の指摘は、この主張を現代的に深化させたものと捉えることができる。この意味でPG論がめざす方向のひとつは、古典への回帰であり、その問いの現代的展開である。

3. 略奪による蓄積

だがもちろん、2000年代以降に展開した議論も大きく響いている。そしてこの点でも、ハーヴェイの理論的展開はきわめて重要である。上記の引用においてハーヴェイは、「やはり、産業資本に基づく第一の回路の方が支配的である」と論じているが、あくまでこれは、1973年時点での認識だった。まさにこの年、金本位制から変動為替制へ移行することでブレトンウッズ体制は崩壊し、世界資本主義は新たな段階へと突入しようとしていた。その後、1980年代に入り新たに台頭したのが、のちに新自由主義と定義されるレジームである。そしてその状況下においてこそ、ジェントリフィケーションが世界的現象となり都市を席卷していった。

ハーヴェイは、とりわけ2000年代に新自由主義の

問題に取り組むなかで、マルクスによる本源的蓄積の議論を再読しつつ、「略奪による蓄積」という概念を提示した。そこには、土地の消費化・私有化や農民の強制排除、債務による支配、特許や知的所有権の独占、公的年金や教育・医療への権利の縮小などが含まれるが、これら多様な形態を貫くキーワードのひとつが「レント」である。この言葉で示されるのは、狭義の地代や家賃だけではない。特許や知的所有権がそうであるように、あらゆるものを商品化しつつ、それに対する独占権が利潤の源泉とされる。ハーヴェイのみるところ、このような形態での富や資源の略奪が——価値の生産という基盤から離れながら——ますます支配的傾向となりつつある。つまり現在では、「産業資本に基づく第一の回路の方が支配的」であった時代は遠く過ぎ去り、むしろ「第二の回路」の方が支配的になっている。この世界にあって、金融業や保険業に加え、不動産業の比重が増大しゆくことは、当然の成り行きだった。加えて、情報技術の発展による「時間-空間の圧縮」は、電子空間を経由して債券が地球をくまなく飛び回る状況を生み出した。このような状況のなかで、莫大な量の資本を建造環境へと殺到させる巨大な回路が開かれ、価値生産という基盤を省みることなく投機的な乱開発が地球上を食い荒らす事態が現われ出たのである。

かような「略奪による蓄積」論は、2000年代以降の地理学的研究を大いに活気づけ、とりわけ「グローバルサウス」の都市を事例とした研究が多数生み出される一因となった（というのも、これまで相対的に非市場的であった領域の市場化は、略奪による蓄積の基本論理である）。PG論の際立った特徴は、この「略奪による蓄積」という資本主義批判の分析視角を、ジェントリフィケーション論へと明確に組み込んだ点にある。

4. 一般性と特殊性

ジェントリフィケーションの研究史をふり返るかえるとき、繰り返し課題とされてきた重要な主題があることに気づく。そのひとつは、各地で異なるジェントリフィケーションの多様性や特殊性を認識しつつ、それら多様な経験に通底する構造的論理をいかに探究するか、という課題である。たとえば1996年に刊行されたニール・スミスの著書『ジェントリフィケーションと報復都市』の第8章は、「普遍性と例外をめぐって」とされている。この章の締めくくり

ある言葉を、引用しておこう。

私の考えでは、これらすべての経験を、根本的に異なる経験的事象として個別ばらばらに解釈するのは間違っている。なにより必要なのは、以下のようなスケール間の緊張を踏まえることだと思われる。一方では、特定の都市や近隣、さらには特定のブロックにおけるジェントリフィケーションの個性がある。他方には……時をほぼ同じくして大陸を越えてジェントリフィケーションを出現せしめた、一連の総体的な条件と原因がある。一般理論に重きを置く者は、ローカルな経験の細部に反応する柔軟性によってこそ力を与えられるものだし、逆もまた然りなのだ。(Smith 1996=2014, p. 310)

この一般性と特殊性の認識という課題は、2000年代に新自由主義をめぐる議論のなかでいっそう深化された。ハーヴェイは「新自由主義の理論」と「新自由主義化の現実」とを区別し、この間にある緊張関係に注意するよう促した (Harvey 2005=2007, p. 35)。プレナーとセオドアは後者を「現実にある新自由主義 (actually existing neoliberalism)」と呼び、それを「理論としての新自由主義」から峻別するとともに、ネオリベラルな再編プロジェクトが有する地理的側面、なかでも「経路依存的な性質」と「都市の戦略的役割」の多様性を強調した (Brenner and Theodore 2002)。このような認識の分節化は、第一に、原則的に自由を礼賛するはずの新自由主義の理論が、なぜ暴力的な国家介入を帰結させるのかを説明するうえで重要である。第二に、経路依存性を強調することにより、新自由主義が実現される道筋は都市や国家の政治的・社会的・経済的条件により多様でありうるという認識を開くものであった。

2000年代に新自由主義を主題として切り開かれたこの認識は——ドリーン・マッシーによる場所の関係的理解と並んで——PG論の重要な基盤を与えたものと考えられる。だからこそPG論は、次のような思考をきっぱりと否定する。まずロンドンやニューヨークなど特定の都市がジェントリフィケーションのモデル的中心として存在し、そこから他の場所へと概念や実践が「輸出」されるなかでジェントリフィケーションの様態が多様化する、といった思考である。言い換えれば、それぞれの地のジェントリフィケーションがニューヨークなどの「モデルケース」からどれほど乖離しているかという問いは、PG論においてはもはや意味をなさない。むしろPG論は——新自由主義をめぐる議論がそうであるよう

に——それぞれの都市で生じるジェントリフィケーションの過程の固有性をそれ自体として認識したうえで、それら多様な経験に通底する構造的論理を探究しようとするのである。この作業を成すにあたって召還されたのが、先に述べたようなハーヴェイの議論であった。また重要なことに、PG論はその認識論を探究するにあたって、ルース・グラスの文言にまで遡っている。そうして、先進国のみを対象とする都市研究や西洋の経験に偏りがちな調査研究に対して、グラスが警告を発していた事実を再発見している。この点にも、古典へと回帰するなかで新たな視点を獲得しようとするPG論の姿勢が現われている。

強調しておかねばならないが、かようなジェントリフィケーションの状況依存性の強調は、普遍的認識を探究しようとする努力の放棄を意味するのではない。現実的な一般化へと到達しようとするためにこそ、状況依存性や特殊性へのより深い認識が求められているのである。このことは、日本の研究環境にとって重大な課題として受け止めなければならない。日本国内でのジェントリフィケーションをめぐる言説は、多くの場合には、日本の都市と他都市との差異を強調しては、その特殊性や固有性を確認する傾向がきわめて強い。だが理論的な一般性を目指すことのない固有性は、例外主義に陥るしかない。それゆえ、日本国内の事例の固有性や特殊性を突き詰めたその先に、一般的な地平を切り開いていくような、理論的な議論が求められよう

5. 国家と暴力への問い

PG論によれば、ジェントリフィケーションとはたんなる経済的過程ではなく、政治的かつイデオロギー的プロジェクトである。この点を誰より強調したのがニール・スミスであった。スミスは、「報復主義／失地回復主義」(revanchism) という概念によって、ジェントリフィケーションにとって政治的次元が根本的であることを論じた (Smith 1996=2014)。さらに2000年代には、ジェントリフィケーションはいまや「グローバルな都市戦略」と化しつつあると論じ、ますます競争主義的かつ暴力的になりゆく政治的次元を強調したのであった (Smith 2002)。

より一般的に述べるならば、報復主義／失地回復主義とは、資本主義の経済過程であるジェントリフィケーションに対し、国家・自治体 (state) がどの

ように関係しているのかを問う概念である。この認識のもと、2000年代以降は報復主義／失地回復主義を探究する事例研究が盛んとなり、ジェントリフィケーション研究のなかで国家・自治体をめぐる主題が重視されるようになった。なかでも「国家主導のジェントリフィケーション (state-led gentrification)」という概念は、この課題をいっそう前面へと押し出すものであった。

いうまでもなくそれらは、先に述べた「略奪による蓄積」論に深く関連する主題である。このような文脈のなかで生まれたPG論にとって、「報復主義／失地回復主義」や「国家主導のジェントリフィケーション」は、欠くことのできない概念となっている。なかでも注目すべきは、オリンピックのようなメガイベントが、ジェントリフィケーションを論じるうえでの重大テーマとして浮上していることであろう。ギー・ドゥボールが生み出したスペクタクルという概念を援用しつつ北京オリンピックによる都市改造を分析したShinの研究は、この課題を事例研究の側面から取り組むものであった (Shin 2012)。この点は、私たちに重要な課題を突き付けている。というのも、メガイベントに突き動かされたジェントリフィケーションの暴力は、まさに足元で起こっていることだからだ。

そのことは、本誌に掲載された木村氏の論考にはっきりと示されている。日本国内の都市にあって、渋谷の事例はとりわけ重要であるように思われる。強調すべきは、渋谷の事例が、現代の資本主義的都市化が孕む重大な争点を問うていることだ。すなわち渋谷区は、ダイバーシティを強調する政策を展開し、LGBTに対する包摂的な施策を実現させた。だが他方では、公共空間の私有化・商業化に代表される新自由主義的路線がいっそう強化させた。それに伴い、野宿者や支援者・活動家への追い出しやハラスメントといった暴力は、いちじるしく強度を増している。

つまり渋谷においては、ダイバーシティや社会包摂と、報復主義／失地回復主義が併走している。前者だけをみるならば、ジェントリフィケーション論は「差異の政治」へと回収され、その語が本来的に有する階級への視点はかき消されてしまうだろう。またその延長線上には、多様性を回復・促進させる過程として、ジェントリフィケーションを肯定的に捉える主張も引き出される。ただしそれは、後者の暴力的側面を無視した場合の話である。また後者だけに視野を狭めてしまえば、ローカルな場に固有の力学は見落とされ、ジェントリフィケーションの議

論をひどく単純化させてしまうことになる。あまりに当然ではあるが、重要なことは、矛盾しあうこれら二つの側面を、ともに捉えることであろう。そこからは、階級とジェンダーやセクシャリティとの関係をいかに捉えるかという理論的課題が導き出される。そしてそれは、長きにわたるジェントリフィケーション論争のなかでも、もっとも刺激的で重要な論点のひとつである (たとえば『ジェントリフィケーションと報復都市』第5章「社会的な議論」を参照)。

渋谷の事例の重要性は、それだけにとどまらない。木村氏の論考が示すように、宮下公園には、2000年代にグローバルなスポーツメーカー企業であるナイキ・ジャパン社の介入による改造が実施された。さらに2010年代には「新宮下公園等整備事業」が開始され、現在は三井不動産の手により再度の改造が遂行されている。これらの段階を経るごとに公園の私有化と商業化は激化していった。そしていずれのケースにおいても、自治体である渋谷区が、積極的主体として媒介的な役割を担っている。また公園を完全に破壊し、白いフェンスで覆わせるに至った「新宮下公園等整備事業」は、オリンピック開催を見越して始動されたものである。すなわち「本事業は、渋谷駅中心地区の再開発と連携して……宮下公園及び渋谷駐車場を緑の拠点として整備するものです。これにより、周辺への賑わいを創出し、東京オリンピック・パラリンピックを迎えるにふさわしい施設の整備を目指します」¹⁾。この文言に示されるように、メガイベントとジェントリフィケーションは、すでに分かちがたく結び合っている。そこで争われているものこそ、プラネタリー・ジェントリフィケーションなのである。

6. 地理学の理論のために

最後に、次のことを強調しておきたい。地理学や空間論の理論的革新は、資本主義の危機とともにあり、また民衆的な闘争とともにあった。ハーヴェイやルフェーブルは、1960年代後半から70年代にかけての「都市危機」の時代を、直視しようとした。なによりかれらの理論は、異議申し立ての声に応答しようとする試みの果てに、つかみとられたものである (ハーヴェイとルフェーブルは、同時代とはいえず、それぞれ遠く離れた地で、異なった状況に直面していた。にもかかわらず、かれらの向かう先が「空間の生産」という同じ論点であったことは、興味深い

歴史的事実である)。また2010年代の現在では、本誌前号にて特集したように、プラネタリー・アーバニゼーションの議論が巻き起こっている。これはPG論が展開するうえで重要な理論的背景であるが、このプラネタリー・アーバニゼーション/ジェントリフィケーション論についても、ハーヴェイらの理論形成と同じことがいえる。とりわけアンディ・メリフィールドの論考が明確に示すように (Merrifield 2011=2018)、それらの議論は、オキュパイ運動などの「街路の声」に応えようとする試みなのである。

対して日本の地理学や都市論は、あまりに闘争や異議申立てを過小評価してきたように思われる。そうであったために、理論的な停滞へと行き着いてしまったのではないか。おそらく私たちに必要なのは、足元で起きている矛盾や闘争に向き合い、そのなかに可能性を見出していくことだろう。「プラネタリー」という言葉は、決して非政治的で抽象的な理論用語ではない。そこには、「街路へと身を投じよ」と促す実存的な声が、響いているように思われてならない。

注

- 1) 渋谷区ホームページ「新宮下公園等整備事業」(https://www.city.shibuya.tokyo.jp/news/miyasita_kettei.html)、最終閲覧日：2019年1月17日。

文献

- Brenner, N. and Theodore, N., 2002, Cities and the geographies of 'actually existing neoliberalism', *Antipode* 33(3), 349-379.
- Harvey, D., 1973, *Social Justice and the City*. Johns Hopkins University Press. ハーヴェイ, D. 著, 竹内啓一・松本正美訳 1980.『都市と社会的不平等』日本ブリタニカ.
- Harvey, D., 1982, *The Limits to Capital*, Blackwell. ハーヴェイ, D. 著, 松石勝彦・水岡不二雄監訳1989-1990.『空間編成の経済理論(上・下)』大明堂.
- Harvey, D., 2005, *A Brief History of Neoliberalism*, Oxford University Press. ハーヴェイ, D. 著, 渡辺治ほか訳2007.『新自由主義—その歴史的展開と現在』作品社.
- Lees, L., Shin, H-B., López-Morales, E., 2016, *Planetary Gentrification, Polity*, Cambridge.
- Lefebvre, H., 1974, *La Production de l'espace*, Anthropos. 斎藤日出治訳2000.『空間の生産』青木書店.
- Merrifield, A., 2011, The Right to the City and Beyond: Notes on a Lefebvrian Re-Conceptualization. *City* 15(3-4), 468-476.
- メリフィールド, A. 著, 小谷真千代・原口剛訳2018. 都市への権利とその彼方——ルフェーブルの再概念化に関するノート. 空間・社会・地理思想21: 107-114.
- Shin, H-B., 2014, Contesting speculative urbanization and strategizing discontents. *City* 18(4-5), 509-516.
- Shin, H-B., 2012, Unequal cities of spectacle and mea-events in China. *City* 16(6), 728-744.
- Smith, N., 1996, *The New Urban Frontier: Gentrification and the Revanchist City*, Routledge. スミス, N. 著, 原口剛訳2014.『ジェントリフィケーションと報復都市——新たなる都市のフロンティア』ミネルヴァ書房.
- Smith, N., 2002, New globalism, new urbanism: Gentrification as global urban strategy. *Antipode* 34(3), 427-450.